

石川教正と毛利高政の接点

キーワードは真理姫、そして本能寺の変

戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南区)

早朝の電話

三月の早朝、けたたましい電話で起こされる。家族全員が携帯を持っているので、茶の間の電話が鳴るのが珍しくなった我が家。なにこと!?

〇〇さんのお宅ですか? 「あ、ハイ」(フアーイ、なんじゃあ、こんな時間にイ) ヽあのウ、真理姫に子どもがみつかったんです。十人目の子どもが: ヽ「マリ: : : さん?」どこのマリさんですかア、うちの誰と同級生ですかね?」(この時まではまだ寝ぼけている私) ヽ信玄公の御息女の真理姫さんですよ。お宅の毛利高政公の正室のお母さんの真理姫です!! 「アアー!!」と私。

電話の主は「戦国史と人を学ぶ会」と「武田松姫研究

会」の会員で関西在住のS氏。この2つの会は十五年前、武田信玄の四女松姫が主人公のテレビドラマ「女風林火山」をきっかけに結成され、主に武田家を中心にした戦国史を研究しています。

世の中には私なんかをはるかに越えるマニアックな歴史好きの方がゴマンといて、戦国史の人間関係には、会誌を通じて続々と新しいニュースがとびこんでくるのです。

真理姫の夫は木曾義昌

武田信玄には歴史に残っている娘が五人(北条氏政夫人・穴山梅雪夫人・木曾義昌夫人・上杉景勝夫人・織田信忠と婚約した松姫がいます。三女の木曾義昌夫人となったのが真理姫という女性です。彼女は江戸幕府の公式系図ともいうべき「寛政重修諸家譜」に六人、そしてこの研究会では九人の子どもが確認されてきました。(系図A参照)そして今回、十人目の存在があったというのです。しかも彼女は九八歳という当時としては驚くべき長寿だったこともわかっています。

武田信玄の三女に生まれた彼女は一五五五年に木曾家

に嫁ぎます。武田軍の木曾侵入を受けて降伏の証として木曾家からは当主の妹を人質に、かわりに武田家からは娘を送り、美濃や三河の国境の押さえとしたのです。

木曾義仲から十九代目の木曾家は、真理姫との結婚で武田家と親族になり厚遇されますが、これも信玄が生きていた頃のこと、彼が一五七三年に没し、一五七五年の長篠合戦に武田勝頼が敗北したのをきっかけに、新府城造営の賦役増大に不満を募らせた義昌は、一五八二年一月、織田信長に内通、信長に弟を人質に送り、武田家から離れます。夫の謀反を彼女は弟の勝頼に知らせますが、武田側の対応がおくれ、武田×織田信忠を総大将とする徳川+木曾家の戦いで完敗したのが二月。武田家へ人質として送っていた長男・長女及び義昌の母親は勝頼によって磔にされたと記録されています。この戦いを機に穴山梅雪（真理姫の姉の夫）も反旗を翻し、この一五八二年の一月から三月の天目山の戦いまでの三ヶ月間にあつけなく武田家は滅びてしまいます。義昌は信長より戦功として深志城（現松本城）を与えられたのもつかの間、六月十日に本能寺の変が勃発。信濃国全体が混乱しています。これをチャンス？に、松本城の旧領主、小笠

原氏が上杉景勝（真理姫の妹の夫）の力を借りて松本城を奪回、義昌は木曾谷へ撤退することになります。

一五八二年六月以降の混乱は、秀吉が近畿中心に天下取りにむかっていたのに対し、家康は旧武田家の領土および家臣を進んで組み入れ、信州・甲州をまたたくまに制覇しました。

武田家にゆかりの女性を次々に側室にしたのも結婚を通じて人民の心が掌握できる平和的手段をとったものでしょう。当然のごとく、義昌とも盟約を結び、旧領地は保証されたのですが、一五八四年、秀吉×家康+織田信雄の小牧・長久手の戦い以後、義昌は盟約を反故にして、三男の義春を人質として秀吉側についてしまいます（義春は秀頼の近臣として大坂夏の陣で死亡）。

このへんのところ、木曾義昌を評価する上で意見が分かれるのですが、それは歴史を後から見たらの事で、この頃の信州・木曾をとりまく情勢は台風（家康・秀吉・北条家・上杉家）に巻き込まれた小舟のようで、どちらに梶をとるかで木曾家の命運が決まってしまうという状態だったので、彼を「無節操な人」とは簡単にはいえないように思えます。この頃、秀吉の命令で真理姫の二

女・三女・四女が、毛利・蜂須賀・福島ら秀吉子飼いの
 武将たちと結婚しています。

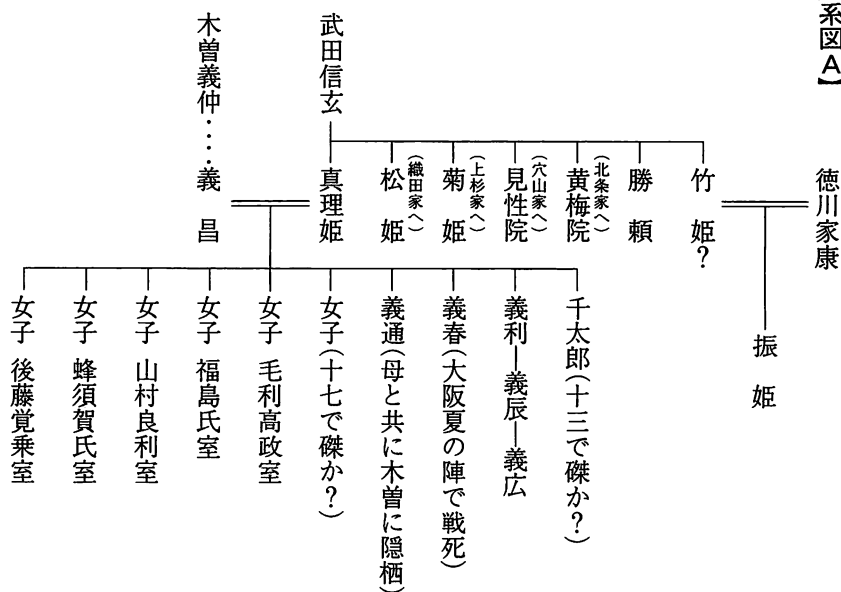
やがて天下をとった秀吉から、小田原の陣に加わらな
 かったことを理由に、下総国網戸に一万石に左遷、これ
 は木曾の良材に目をつけた秀吉の嫌がらせともとれます
 が、移転先の網戸では町造りと干拓に尽くし、領民から
 尊敬されたようで、現在の千葉県旭市の名は、木曾家の
 先祖にあたる木曾義仲が「旭将軍」とよばれていたこと
 によるのだそうです。一五九五年に義昌は網戸で死亡。
 家督は次男の義利が継承。しかし、義利は叔父を殺すな
 ど乱暴なふるまいがあつたことが家康に知れ、江戸時代
 になり改易。その後彼は出家したと伝えられています
 (諸説があつてはつきりしない)。

真理姫は残された末っ子の義通をともない、旧領地の
 木曾に帰り、黒沢という村の上村家で木曾家の再起を願
 いつつ九八歳で亡くなりました。

十人目の発見

松姫研究会では正史以外に三人、さらに今回一人、合
 計十人の子どもを確認することができました。(系図A)

【系図A】



その十人目の方は、後藤覚乗という人の妻になった人で、加賀前田家のお抱えの彫物師だったというのです。後藤家というのは一般にはあまり知られていないのですが、足利家・信長・秀吉・徳川家と、それぞれの時代の施政者に仕え、大判（合金）・分銅役（計量）・彫物（刀装具）の役目を担当して明治になるまで続いた家柄です。覚乗は長乗の次男として一五八九年に生まれています。

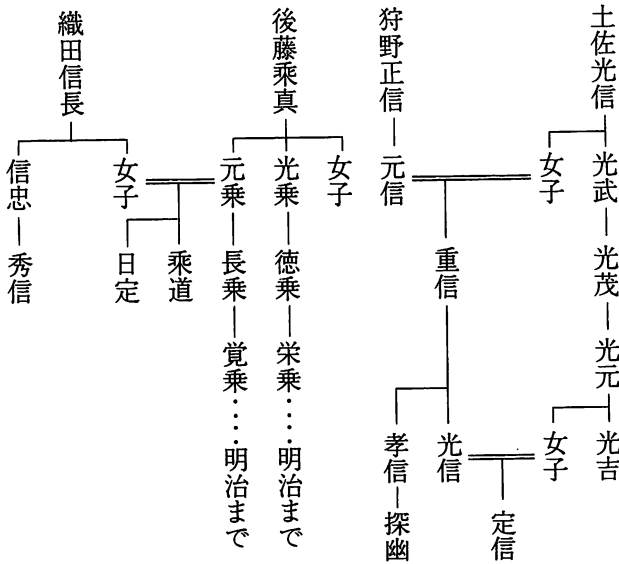
以下、若山泡沫氏「刀装小道具講座二巻後藤家編」より抜粋した記事を系図にしてみました。（系図B）

後藤覚乗は先代長乗の次男として一五八九年に京都で誕生。江戸時代はじめの寛永期に前田家より百五十石で招かれ、京都と金沢を往復しながら、前田家の装剣用具の御用達、金銀財政面にいたるまで御出入りを許されています。

現在の感覚では刀装小道具の作家の地位はなんとなく低く考えられがちですが、明治になるまで格段に高い社会的立場に立っていたことが、結婚した女性達の家柄でもわかってきます。

【註】土佐家・狩野家・後藤家と織田信長の関係略系図（土佐光信 日本美術全集）集英社、「京都の美術史」思文閣出版、「刀装金工後藤家十七代」雄山閣等を参考に、松姫研究会がまとめてみました。

【系図B】



はじめての結婚は、加賀の豪商大森宗也の娘ヤマ、死別の後、信州野尻城主木曾伊予守の娘と結婚したが一六三九年、五八歳で先立たれ、さらに津和野亀井武蔵の娘タケを迎えたが、この女性も一六六二年に死別。これらの有力者との縁組みから、当時の後藤家の地位と財力がわかります。

木曾義昌が信州野尻城主であった記録はないのですが、伊予守だったことは間違いなく、野尻の地名も有名なナウマン象の化石が出た野尻湖の野尻ではなく、木曾と三河の国境の野尻だと仮定した。木曾伊予守の娘が他界したのが一六三九年で五八歳ですから、生まれたのは一五八二年、つまり義昌らの裏切りで武田家が滅び、本能寺の変の年だったことがわかります。確信はありませんが母親は真理姫だったと思います。(側室の子なら臣下に嫁



がせるのがこの頃の常識) 寛乗が一五八九年生まれなので七歳年上になります。前妻が他界したのが一六一七年ですからそれ以後に結婚したと考えられます。木曾義昌は一五九五年に他界しているので、結婚したときはすでに父は亡くなっていました。この十番目の女性には、男の子が一人ありましたが一七歳で亡くなっていて、子孫は絶えてしまっています。

※木曾義昌と真理姫の娘が後藤寛乗の妻になっていたというのは初めて知りました。有名な徳川幕府の「寛政重修諸家譜」などもかなり粗雑で、鵜呑みにしてはいけません。とあります。やはり、地道に家系図や過去帳を調べていく必要があります。

同じく改易の石川家

話が真理姫のことからすっかり横道にはいってしまいました。もう一人、木曾家とほぼ同じ頃、同じ道をたどった大名家があります。

石川教正の子康正です。

石川家は家康が今川義元の人質時代から彼の近侍として教正が仕え、徳川家の家老となり、家康の長子信康の後

見人として、信康亡き後は岡崎城代として、武功と外交手腕で徳川家康の重鎮だった人物です。それが、一五八四年小牧・長久手の戦い以来、教正が家康と秀吉との和睦を提案したのをきっかけに突如として家康のもとから出奔し秀吉のもとへ逃亡。これには諸説があつて謎が多く、多くの歴史家・小説家によつて様々な憶測がなされていますが、とにかく徳川家は教正出奔以後は軍制をすべて甲州流に変えることになつたといひます。

その後、教正は秀吉から河内八万石を与えられ、後に信州松本十万石に加増、一五九三年に教正が亡くなると長男の康正が継ぎ、松本城の天守閣をはじめ、すべてを完成させます。(一五九七年)

一六一三年、大久保長安事件に連座し、改易。豊後国佐伯に流罪になります(この事件の説明は省略させてもらいます)。

木曾義昌と石川教正。ほぼ同じ時期に家康を裏切り秀吉側についた後、家康と秀吉が同盟関係を結んだため秀吉の仲介で両家とも家そのものは続きますが、その背信行為は徳川家にとつて根強く残り、ほんのささいなことから改易に追い込まれてしまひます。

前後して松本城主になつていたことも不思議な共通点がみられます。

本能寺の変(一五八二) 前後

地図を見ればわかりますが、本能寺の変当時、石川教正は岡崎に、木曾義昌はそこから谷伝いに北方の木曾から松本に至るまで治めていました。両家とも信長の家臣としてです。家康の本拠地はずつと離れた浜松でした。

(図A)

領土が隣り合わせで、共に協力して武田家を滅ぼした二人は、本能寺の変の直後から、秀吉側の誘いに乗つていきます。秀吉は、教正には恩賞を、義昌には信頼厚い近習の毛利高政の正室に彼の娘を結婚させることで自側面に抱き込んでしまふのです。

本能寺の変の時、どこにいたか、どこが領地だったかが、戦国大名のその後を大きく変えるキーポイントだったと確信しています。そして徳川家を一次的にも裏切つた大名は江戸時代になつて、ほぼまちがひなく改易されています。

では高政はどうかといえば、秀吉の信頼が厚いといっても小大名だったこと、徳川家自体に対しての裏切り行為はしなかったこと、もう一つ、妻のおかげと断言できます。

武田信玄には竹姫という娘が存在し、この女性が家康の側室となり、振姫を生んだというのが、戦国史と人の会誌で発表がありました。三河国の徳川家の菩提寺である大樹寺の過去帳に記されているもので、これが事実とすると、家康にとつて、毛利高政は、妻の姉の娘の嫁ぎ先にあたるからです。ただ単に、妻の身内ということではなく、武田家の血が流れているということは家康にとつて大切なことだったのです。

当時は今考えられている何倍も女系の持つ力は大きかったし、信州・甲州を治めるには、その土地の女性、つまり武田家ゆかりの女性と結婚するのが一番早くてスムーズにいく方法でした。しかも武田家・木曾家共に名門、権力はなくなっても権威だけは残っていましたから、上手に利用したんです。家康の側室で甲斐出身は、西郡局・下山局・お牟須の方・お仙の方・阿茶局・お竹の方と公に残っている女性だけでもこんなにいるのです。

その後の真理姫一家

けれども、江戸時代になって平和な世の中が続くと、かつての領主の娘たちとの結婚は必要がなくなり、逆に、ひんばんにお国替えによって大名と領民のつながりを薄くし、大名同士の結婚は幕府の許可を必要にしてしまします。

真理姫は旧領土の木曾で九八歳まで生き、木曾家の再興を願い続けたと地元郷土史研究家の方は言います。が、ついにそれはかないませんでした。良材を産出する木曾は幕府の直轄地となり、代官所が置かれます。この代官を代々務めた家が山村家といい、かつては木曾家に仕えていました。良通―良利―良候―良勝：と明治に至るようですが、良利の妻に真理姫の五女が嫁いでいるので（これも旧領主の女性との結婚にあたる）木曾家の再興はできなかつたけれど義昌・真理姫の血は木曾に残ったことになりました。

大河ドラマ「篤姫」が人気です。あまりにもホームドラマ風で私は好きではないのですが、篤姫の生き方は、四百年前の真理姫と同じものを感じます。

偉大な父から、ある使命を受けての結婚、その使命が
 はたせないうちに父が死亡。かつての父の部下たちに婚
 家は滅ぼされてしまう。二人の女性は滅びに向かつてい
 く。家を必死で守ろうとします。攻撃より守備が難し
 いのは政治・スポーツ・恋愛すべてにいえること。滅び
 ゆく家を、いわば執念と気迫を持って対峙した二人の女
 性。子どものなかった篤姫の徳川家は華々しく残り、十
 人もの子どもを産んだとされる真理姫の子孫は、地方の
 郷土史家の一つ一つの調査によっての掘りおこしで、少
 ずつ明かされようとしています。

家康vs.秀吉 外交戦略図 (1584年頃)

図A

